

イギリス探偵小説における死生観  
ーコナン・ドイルとアガサ・クリスティの比較ー

220206 花田 真那仁

序章

探偵小説というジャンルを創り上げたといわれるコナン・ドイル(Conan Doyle, 1859-1930)と、ミステリの女王と呼ばれるアガサ・クリスティ(Agatha Christie, 1890-1976)は、共に世界的に有名なイギリスの探偵小説家である。ドイルは19世紀末から20世紀にかけて活躍した、戦争と医療の経験が豊富な作家であり、1886年に開始したシャーロック・ホームズシリーズは世界中で大人気となった。一方、クリスティは20世紀に活躍した作家であり、第一次世界大戦で篤志看護師を経験後、探偵小説で成功した。特に、1920年に開始したエルキュール・ポアロシリーズは、代表シリーズの1つとなっている。

探偵小説において死は切っても切り離せない存在である。探偵の調査対象となるのは殺人だけとは限らないが、人気の高い作品はどれも凶悪殺人が発生していると言っていいだろう。本稿で扱う作品は全て戦争の時代に生まれたものであり、当時の探偵小説には戦争の苦しみを癒す逃避文学としての作用があると、多くの研究で明言されている。小説家の笠井は、緻密に練られた犯行計画によって殺害される人間は、戦場で偶然のように殺された無数の死者よりもはるかに「人間的」に扱われており、被害者の屍体は、犯人の行為を再現し追体験する探偵の推理によって、第二の光輪を与えられさえすると論じている(75)。この論に従うならば、探偵小説の死と戦争の死には繋がりがあり、探偵小説で死を扱うことには大きな意味があると考えられる。戦争で負った死への悲しみを、死を娯楽化した作品で癒すことは、大量死を経験していない世代には想像し難いだろう。しかし、現代社会にも自殺数の増加など、死に関する問題は身近に多く存在している。そのような現代において、死と向き合い、死の力で人々の救いとなった探偵小説に表れる死生観を考察することは、現代での死との向き合い方に新たな見解を見出せると推測できよう。

そこで本稿では、ドイルとクリスティが作品に表す死生観を比較し、共通点と相違点を見出すことを主題とする。また本稿の目的は、死生観の比較分析を通して、死に関わる問題が多く存在する現代のイギリス社会において、探偵小説に描かれる死生観の意義を明らかにすることである。両者を比較している先行研究の中でも、死生観に着目したものは非常に少ないため、作品や社会に対する新たな解釈を提示できるのではないだろうか。

研究方法としては、ドイルによる『最後の事件』(*The Final Problem*, 1893)及び『バスカヴィル家の犬』(*The Hound of the Baskervilles*, 1901)と、クリスティによる『オリエン特急の殺人』(*Murder on the Orient Express*, 1934)を分析し、死生観の比較を行う。ドイルは『最後の事件』内でホームズを殺害することで、一度ホームズシリーズを終了させており、次作の『バスカヴィル家の犬』でシリーズを再開させるまでには、8年もの空白があった。この間にドイルはボーア戦争に参加するなど、死生観に影響を与えうる経験をしている。

ゆえに、この 2 作品では死生観に差異が生じるのではないかと考えられるため、ドイルからは 2 作品を取り上げる。対して、クリスティは第一次世界大戦という大量死を経験した後に、小説家としてデビューしたため、彼女の死生観を探るには 1 作品で十分だといえる。これら 3 作品を取り上げた理由として、共通して「犯罪者の死」が描かれており、それぞれ死にまつわる様々な議論が展開されている作品であることから、作家の死生観が特に表れていると推測できるためである。

第 1 章では、ドイルによる『最後の事件』と『バスカヴィル家の犬』に描かれる死生観を読み解く。まず、ドイルの生涯に関して戦争での医師経験などに着目して、死との関わり方を探求する。続いて、『最後の事件』に表された死の描写を整理すると共に、作者であるドイルが作品内でホームズを殺害した理由と、作品に描かれる犯罪者の死との関連性を検討する。最後に、『バスカヴィル家の犬』における死の描写を整理し、ドイルがホームズを帰還させた方法を分析する。以上を通して、ドイルが作品に表す死生観を明らかにする。

第 2 章では、クリスティによる『オリент急行の殺人』に描かれる死生観を読み解く。初めに、クリスティの生涯に関して戦争と篤志看護隊での経験に着目して、死との関わり方を探求する。次に、『オリент急行の殺人』における死の描写及び死に対する乗客らの反応を整理し、死の描かれ方を検討する。最後に、作品のメッセージ性から作品内での死の用いられ方を検討し、作品に表された死生観を明らかにする。

第 3 章では、2 人の死生観の比較分析を行う。まず、逃避文学として流通した当時の探偵小説に描かれる死に求められていたものと、実際にそれが与えた影響を分析する。続いて、2 人の死生観の共通点と相違点を、第 1 章と第 2 章の分析結果をもとに明らかにする。そして最後に、イギリス社会における探偵小説に描かれる死生観の意義を見出す。

## 第1章 コナン・ドイル『最後の事件』『バスカヴィル家の犬』作品分析

本章では、『最後の事件』と『バスカヴィル家の犬』の分析を行い、ドイルの死生観を考察する。まず、ドイルの生涯における死との接点を、戦争での医療従事経験と心霊主義への考え方をもとに探求する。次に、『最後の事件』における死の描写を分析し、作者であるドイルが作品の主人公ホームズに死を与えた理由と、犯罪者の死について論じる。最後に、『バスカヴィル家の犬』における死の描写とホームズの帰還に焦点を当て、ドイルが作品に表す死生観を明らかにする。

### 第1節 コナン・ドイルの生涯からみる死との関わり

本節では最初に、ドイルの生涯に関して戦争での医療従事経験から、死との関わり方を探求する。特に、『最後の事件』と『バスカヴィル家の犬』発表の間の時期に勃発したボーア戦争(1899-1902)を取り上げる。続いて、ドイルの心霊主義への興味に着目して死に対する考え方を検討する。

まず初めに、著者の経歴を整理する。1859年にスコットランドのエディンバラで誕生したドイルは、エディンバラ大学に入学後、ホームズのモデルになったともいわれるジョゼフ・ベル博士のもとで医学を学んだ。卒業後はハンプシャー州南部のポーツマス郊外に診療所を開き、医師として働く傍ら執筆作業を開始した。1887年に出版したホームズシリーズの第1作目『緋色の研究』で一躍有名となったドイルは、小説の収益で1891年にロンドンで眼科医として開業し診療所を設けるが、患者が訪れず数週間で閉院することとなる。以降は作家業に専念し、1927年までに長編小説4作品、短編小説56作品のホームズ作品を発表した。世界的に大ヒットしたホームズシリーズだったが、重要な点はドイルがこの結果を望んでいなかったことである。彼は探偵小説という娯楽作品を見下し、高尚な歴史小説家を志望していた。そのため、ドイルの意思とは裏腹に架空の探偵ホームズは人気を博し、探偵小説家としてのドイルの名前だけが独り歩きする結果を生み出したホームズを、ドイルは憎んでいたのである。その結果、彼はホームズシリーズを終わらせるために『最後の事件』でホームズに死を与えるに至った。

ボーア戦争では、ドイルは医療奉仕団の医師として戦地に赴いた。英米文学者の Wynee は、ボーア戦争中のドイルの行動に関して、モラルの曖昧さを指摘している。彼女によると、ドイルは戦争への強烈な興味やキャンプの雰囲気魅せられ少年の冒険物語のような興奮をもっており、兵士の死体を調査する様子はモラルに欠け、書籍内での死体の詳細な描写や死体をチェスの駒に例えた記述などに、モラルの欠如が表れていると論じている(31-33)。彼女が指摘する、戦争という死と隣り合わせであるものに対する好奇心や、死者に対するモラルの欠如は、死を娯楽作品で扱うドイルの執筆活動と一致する思考だと捉えることができよう。

また当時の社会では、ボーア戦争などの大戦をきっかけに、精神疾患“shell shock”が問題視された。これは戦争のトラウマによって引き起こされる、心的外傷後ストレス障害の一種

である。Wynee は、ドイルは戦場での医療従事経験から精神疾患を抱えた兵士への理解を深めたとともに、自身もトラウマを抱えたのではないかと論じている。彼女は、ドイルが好きなホームズ作品を尋ねられた際、ボーア戦争の過酷な医療状況のトラウマに記憶を奪われ、作品名を思い出せなかったと推測している(31)。彼女の推察に従うとすると、戦争でのトラウマに苦しむ人々を見て、なおかつ自身もトラウマに苦しんだドイルが、なぜその苦しみの根源である死を探偵小説という娯楽物に取り入れたのかという疑問が生じる。

この疑問に関して、心霊主義への興味から分析を試みたい。執筆活動開始前から心霊主義に興味を示していたドイルは、『最後の事件』発表の2年前である1891年に心霊研究協会に入会したと、彼の心霊学に関する著書に記述されている(『コナン・ドイルの心霊学』45)。一方で、ドイルは第一次世界大戦勃発により、生を真剣に見つめさせられ、いったい何のために生きているか考えさせられたと論じていることから(『コナン・ドイルの心霊学』51)、心霊主義への興味が真剣なものになったのは第一次世界大戦時であると解釈できよう。しかし、協会に入会した時点で霊魂に思いを馳せて、死者の苦しみに寄り添う気持ちがあったとも考えられる。『最後の事件』発表の6年後に始まったボーア戦争ではイギリス本土は戦場にはならず、国民はまだ大量死に直面してはいないが、理不尽に家族を失った者や心を失った兵士は大勢いた。そんな現実の傷を娯楽作品に落とし込んで昇華することで、ドイルなりに彼らの苦しみに寄り添ったのではないだろうか。ホームズシリーズは年齢・階級問わず全ての国民に親しまれており、メッセージを伝えるには最適な媒体であったと考えられる。

ドイルには、ボーア戦争参加時は死者に対するモラルの欠如などがみられたが、その後、戦争でのトラウマを経験し、元から持ち合わせていた心霊主義に対する興味も影響した結果、死者の苦しみに寄り添う考え方へ変化したと推測することができよう。次節以降の作品分析において、実際にこの変化が作品に表れているのか、検討していく。

また、作家のライリー&マカリストは、第一次世界大戦でドイルの心霊主義への興味が真剣なものになったにも関わらず、ホームズは作品内で幽霊話を愚かなことであると退け、超常現象は懐疑的だと明言していると主張している(266)。実際に、ドイルが心霊主義に熱心であった期間に発表された『サセックスの吸血鬼』(1924)で、ホームズは「この事務所は大地にしっかり足をおろしているのだ。今後もそうでなければならぬ…幽霊まで相手にしてはいられない」(143)と発言しており、ホームズがドイルとは真逆の意見を持っていると読み取れる。この点に関して、ドイルがホームズを憎んでいたことから、ホームズと自分を重ねることを拒否したために、彼らの主張が一致していないと推測できよう。以上より、ホームズの死に対する考え方が、ドイルの死生観を完全に反映しているとは断言できないと考えられる。

## 第2節 『最後の事件』におけるホームズとモリアーティ教授の死

本節では、前節で分析したドイルの生涯における死との関わり方を踏まえて、彼が作品に表す死生観を明らかにするために、『最後の事件』の作品分析を行う。本作品は、作者であ

るドイルが主人公ホームズに死を与えた唯一の作品であり、他作品と比べてドイルの死生観が強く反映されていると考えられる。そのため、本作品内の死の描写とドイルがホームズを殺害した理由、そしてモリアーティ教授という犯罪者の死に着目することで、本作品に表れる死生観を検討する。

『最後の事件』は、1893年12月に『ストランド』誌にて発表された短編小説である。ホームズが宿敵であるモリアーティの魔の手から逃れるため、助手のワトソンと共に国外に逃亡するも、ホームズとモリアーティはスイスのライヘンバッハの滝で決闘となり、共に滝つぼへ転落して命を落とす結末を迎える。本作品の重要な点は、語り手であるワトソンが2人の死を目撃しておらず、彼らの死はワトソンの推測にすぎない点である。現に、10年後に発表された短編小説『空き家の冒険』(1903)で、ホームズは死亡していなかったことが明らかにされている。

まず、『最後の事件』における死の描写を分析する。作品内で、死の様子は以下のように語られている。

二人はとっ組みあったまま滝つぼへ転落していったのだということに、すこしの疑念ものこらないことになった。いろいろと方法が講じられたが、死体の収容は絶望だった。もっとも危険な犯罪王と、時代にぬきでた大探偵王とは、かくして渦まき湧きかえる深淵の底ふかく、永遠に横たわることとなったのである。(342)

上記に引用した部分には、死にゆく様子や死体の詳細な描写がなく、曖昧さが表れているといえる。この点には、死という残酷なものを描くことに対する配慮と、ホームズを滝から帰還させてシリーズを再開できる余地を残した意図があったと推測される。この余地を残した点に、ホームズを殺害することへのためらいや罪悪感があったと解釈できよう。

翻訳家の延原は本作品の訳者あとがきにおいて、探偵小説は残忍かつグロテスクな表現の影響で不徳義に陥りやすいが、ドイルはそれを避けようとしており好感が持てると意見している(「解説」『シャーロック・ホームズの思い出』343-44)。確かに上記引用部分を含め、本作品には残忍でグロテスクな表現は見つからず、ドイルがそのような表現を避けていると推測される。死の残酷さで読者の興味を誘うのではなく、あえてそれを避けたことが、死を扱ったホームズ作品が娯楽として受け入れられ、人気となった要素の1つといえるのではないだろうか。

次に、作者のドイルが作品内でホームズを殺害した理由を検討する。前節で触れた通り、ドイルは本作品でホームズシリーズを終了させるためにホームズに死を与えた。ホームズ自身は自分が死ぬことに対して、どのように捉えていたのだろうか。彼は、モリアーティとの戦いの際に以下のように発言している。

もし彼をうち倒し、社会をその魔手から救いえたら、そのときこそ僕の経歴がその最高

点に達し得た喜びを感じるし、また僕はすぐにも探偵の仕事をやめて、平穏な生活にはいってもいいとさえ思う。ここだけの話だが、こんどスカンジナビアの王室およびフランス共和国のために助力したおかげで、僕は大好きな平穏な生活に入り、化学の研究に没頭できる身分になった。(319)

また、ホームズがモリアーティとの決闘直前に死を覚悟して、ワトソンに向けて書いた手紙の中では、以下のように記述している。

彼の害毒から社会を解放し得るのだと思うと、その代償として友人諸君、ことに君には大きな苦痛をあたえねばなるまいけれど、それでも大きな喜びを感じるものだ。しかしいつかも君にいつかおいた通り、僕の経歴はこんどで最高点に達したものだから、僕としてはここでそれに終わりをづけさせるくらいうれしいことはないのだ。(341)

上記の 2 つの引用部分から、ホームズはモリアーティをこの世から消し去ることができるのであれば喜んで探偵をやめ、自分の命を捨ててもよいと考えていることが読み取れる。しかし、他の作品では、ホームズは平穏をつまらないものとし、常に危険で刺激的な事件を求める人物として描かれている。例えば、『最後の事件』の 1、2 か月前に発表された『海軍条約文書事件』(1893)では、ホームズは「ただの平凡な殺人事件さ。君はもっと面白い事件を持ってきたんだろう」(264)と、犯罪の中でも重罪である殺人事件をつまらないものかのように表現し、より刺激的な事件を求める発言をしている。また、ホームズ帰還後の作品である『高名な依頼人』(1925)では、事件の依頼人が殺人犯を「こんな危険な人物はありますまい」(8)と語ったことに対し、ホームズは「お言葉のような愉快な人物なら、私も数人相手にした経験があります」(8)というように返答し、殺人犯を愉快と表現していることから、危険を楽しんでいると解釈できよう。

加えて神経内科医の **Balcells** が、ホームズは仕事がない時のみ鬱病になるため、事件がなく暇なときはコカインを使用することが多く、仕事で活動し続けることが彼の症状の最適な治療法であると指摘しているように(138)、事件の謎を解くことが一番の鬱病の治療法であり、彼の生きる糧であると解釈できよう。以上より、ホームズが平穏な生活や、自らを犠牲にして悪人を排除することを心から望んでいるとは考えにくいため、上記引用部分の発言には違和感を抱かざるを得ない。つまりこの発言は、ホームズの本心ではなく、作者のドイルがホームズの意に反して言わせた言葉であると捉えられる。よって、この結末は作品の中に生きるホームズの性格に忠実なものではなく、ホームズはドイルの自己都合で強引に殺害されたといえる。

ここで浮かぶ疑問は、シリーズを終了させるのであれば死以外にも、探偵を引退させたり、作品を打ち切りにしたりなど複数の方法が考えられる中で、なぜホームズが望んでいない死を与えたのかということである。この死を選択した点に、ドイルの死生観が強く表れている

ると推測できよう。精神分析家のバイヤールはドイルがホームズを殺害した理由として、読者がドイルとホームズを同一視したため、ドイルはホームズに自身のアイデンティティを脅かされていると考えていたと推測している。ドイルが、私がホームズを殺さなければ彼が私を殺すだろうといった発言をしているように、ドイルはホームズとの心理的共存によって苦しめられ憎しみを抱いていたと、彼は主張している(154)。また、延原もドイルは実際の犯罪事件の捜査が彼のもとに持ち込んでこられるなど、作者のドイルがホームズと混同させられることに迷惑していたと論じている(「解説」『バスカヴィル家の犬』 317)。前節で指摘した通り、作者であるドイルは登場人物のホームズに、死生観などを含めた意思を完全に反映させてはいないと考えられる。そのため、ドイルはホームズと同一視されることに自身のアイデンティティの喪失を恐れていた可能性は十分にある。この恐怖から解放されるためには、死という手段でホームズを亡き者にしなければならないと考えることも自然だと推測できよう。

最後に、モリアーティ教授という凶悪な犯罪者の死について検討する。先に引用した部分において、モリアーティを逮捕するのではなく、社会から葬り去るという考え方をホームズが持っている点から、犯罪者は死に値すると捉えていると読み取ることができる。よって、本作品には犯罪者の死を肯定している要素があるといえる。英文学者の中尾は、モリアーティはほんのわずかしか登場せず、軽く話題に上がる程度であり、ワトソンが彼を一度も目撃していないことから、その存在を疑う人さえいると論じている(71-72)。さらに彼女は、モリアーティはホームズの潜在恐怖であって現実におらず、ホームズの片隅にあった不安、悪への願望が顕在化したという説について指摘している(78)。彼女の指摘の通り、モリアーティは高い知名度に比べて登場場面は少なく、まるでホームズ殺害のために生み出されたようである。よってモリアーティは、ホームズの潜在恐怖であり、かつ作者であるドイルのアイデンティティの喪失という恐怖の顕在化ともいえるのではないだろうか。以上より、モリアーティは、ホームズ殺害のきっかけとして、ドイルに利用されて殺害された被害者と捉えることができよう。死の曖昧な描写から、ドイルはホームズを殺害することに罪悪感を抱いていたと推測できることは、先に指摘した通りである。よって、悪人であるモリアーティを用いることで、少しでもその罪悪感を軽減させようとしたと捉えられる。この点においては、作品で死を扱うことに対するドイルのモラルの欠如がみられるといえる。

### 第3節 『バスカヴィル家の犬』における犯罪者の死とホームズの帰還

本節では『バスカヴィル家の犬』を、犯罪者の死の描写とホームズの帰還に着目して分析する。前節で分析した『最後の事件』では、ドイルがホームズに死を与えたのに対し、『バスカヴィル家の犬』では、ドイルはホームズを死から呼び戻している。この点に関して、2作品は対照的でありながら強いつながりがあり、両作品を分析することでより明確な死生観の分析を試みたい。まず、死の描写と死に対するホームズらの反応について整理する。続いて、ドイルがホームズを帰還させた方法について検討し、ドイルが作品に死を用いること

に対する考え方を分析する。

『バスカヴィル家の犬』は、1901年8月から1902年4月にかけて『ストランド』誌へ分載されたホームズシリーズの3作品目の長編小説であり、『最後の事件』が発表されて以来8年振りのホームズ作品である。しかし、作中の時系列は『最後の事件』よりも前となっているため、本作品発表時点ではホームズの死は確定している。名家バスカヴィル家の当主の不審死と魔犬の伝説の謎をホームズが解き明かす本作品では、多忙なホームズに代わりワトソンがバスカヴィル家に出向いて調査を行うため、彼の語りと日記、ホームズに向けた手紙によって物語が進行する。

まず、脱獄囚であるセルデンの死の描写を分析する。彼の死は、「首が折れて胴体の下になり、肩をすくめてうつ伏した姿は、じつに凄惨ともななんと形容するに絶する光景…血にそまった手先や、粉碎された頭蓋骨から血潮のながれたまった酸鼻な姿」(241-42)と語られている。しかし、不気味な情景描写が多く目立つ本作品において、一大イベントでもある死体発見時の描写は上記のみであり、死を詳細に描写しないドイルの姿勢が表れている。

次に、彼の死に対するホームズの反応に着目し、ホームズ自身の死生観を検討する。ホームズらは死体発見当初、死体がセルデンのものではなく、事件調査の依頼主かつ護衛対象であったヘンリー卿のものだと勘違いしていた。ホームズが、死体がセルデンのものであると気づいた時の様子をワトソンは、「とつぜん私の手を痛いほど強く握って、笑いこぼげながら躍りまわったのである。これがふだん厳格で自制心つよく、ものに動ぜぬわが畏友シャーロック・ホームズの正気な振舞であらうか」(245)と語っている。この表現から、彼が犯罪者であるセルデンの死に歓喜している姿が読み取れる。死体がヘンリー卿のものではないと分かったための喜びと解釈することもできるが、このような文章表現では犯罪者の死を肯定しているように解釈できる。ホームズが上記の反応を取った理由として、彼の事件を解く際の正義感が人の命を守るものではなく、自分の利益に基づいているものであるということが指摘できよう。つまり、自分の興味関心のあるもの、本作品における当主チャールズの死と魔犬の謎以外の事件に興味関心がなく、謎を解き明かすためならその過程で犠牲が出ることを気に留めないという考え方によって彼は行動していると考えられる。

その根拠として、ホームズの行動から2点を提案したい。1点目に、罪の見逃しという行為が挙げられる。作品内でバスカヴィル家の執事夫婦は、親族であるセルデンの逃亡を幫助していた。これに対してホームズは、「あなたがたはみんな法律違反をやっています。良心ある探偵なら、何より先にあなたがたを、一人のこらず逮捕するところでしょうね」(257)と意見し、罪を見逃している。これは、セルデンを助けた執事夫婦に対する情けや優しさの表れではなく、単にホームズが、自身が追う事件以外に興味関心がない心の表れだと考えられる。英文学者の宮地はホームズに関して、殺人の痕跡の発見とその再現に興味と生きがいを見出すエキセントリックな人物だとしたうえで、人生はドイルにとって退屈極まりないものであり、「平凡この上ない」人生を「不可思議千万な」人生に一変させることが彼の犯罪学的な見方であると論じている(65-66)。彼の論によると、ホームズにとって事件を解決

するうえで持ち合わせる正義感は、人生を楽しむためという自分の利益に基づいていると解釈できる。そのため、自分の興味のない罪を見逃しており、事件で傷ついた人々を救うことを重視していないことは、セルデンの死への反応からも読み取ることができよう。

2点目は、ヘンリー卿にトラウマを与えた点である。作品の終盤で、ホームズは犯人であるステープルトンの犯罪の証拠を握るため、護衛対象であったヘンリー卿をおとりに利用して魔犬をおびき出した。魔犬に襲われたショックでトラウマを負い、療養することとなったヘンリー卿に対して、ホームズは以下のように発言している。

依頼者たるヘンリー卿に、あんなひどい精神的ショックをあたえはしたけれど、ステープルトンを自滅に追い込んで、ともかくも事件は解決した。ヘンリー卿をあんな目にあわせたことについては、僕も責任を感じるけれども、あんな恐ろしい猛犬が現れるとは夢にも思わないし、それにおりあしくあんな濃霧がおりて、いきなり目の前に飛び出すまで、犬が見えないようなことになろうとは、誰だって予想もしないことだものね。

(310)

ドイルがボーア戦争でトラウマを負ったことや、その症例に理解があることは本章第1節で確認した。しかし、上記引用部分では依頼人にトラウマを負わせており、それに対して言い訳をしていると読み取れる。この点において、ホームズは謎の解決という自分の興味関心を最優先にしており、護衛対象者の精神に犠牲が及んだことを正当化していると解釈できよう。加えて、上記引用部分では犯人ステープルトンを自滅に追い込んだことに対する後悔や懺悔の感情は描写されていない点から、脱獄囚のみならず殺人犯の死をも正当化している発言であるといえる。

続いて、ホームズの帰還に関して分析する。本作品において、ドイルはホームズを呼び戻すことを躊躇していたが、出版社の商業的な圧力に負けてホームズを登場させた。しかし、前節で確認した通り、ドイルはホームズに憎しみを抱いており、殺人を犯してまで決別したホームズを帰還させた理由が、金銭だけというのは納得し難い。一度殺害した人間を呼び戻す行為に表れる、死への考え方はどのようなものであろうか。ここでは、ホームズを呼び戻した理由ではなく、帰還させた方法に着目することで、本作品での死の用い方を明らかにし、ドイルが作品に表す死生観の分析を試みる。

精神分析家のバイヤールは、この作品にはドイルがホームズを殺したいほど憎み続けた痕跡が至る所に残っており、ホームズに対する象徴的な殺人が行われていると指摘している。彼は、本作品はホームズの登場場面が極端に少ない作品であり、序盤でホームズはワトソンに調査を託すと姿を消し、終盤に再登場するも間違った推理を披露しているため、ドイルがホームズに華々しい活躍をできるだけさせないようにしたと分析している(163-64)。実際に、本作品はワトソンの語りと彼の日記、そしてホームズに宛てた手紙で構成されており、ホームズの出番が極端に少ないことから、ホームズから活躍の機会を奪っていたと解釈で

きよう。

加えてバイヤールは、ワトソンがバスカヴィル家の館がある荒野で、謎の人影（ホームズの変装）を見かけた際、ワトソンの誤解によってホームズは侮蔑的な言葉で描かれ続けており、ドイルの隠された感情を無意識のうちに表していたと論じている(165-67)。確かに、謎の人影は「月光を背にあびて墨絵の影人形のように、一人の男がつたっていた…荒れ地の精霊なのかもしれない」(183)や、「謎の怪人物」(221)というように、少し敵対心がこもった言葉で語られている。しかし、「守護神の使いなのだろうか」(228)というように、ワトソン側を守る存在であるかのような記述があることから、ホームズへの憎しみが完全に表れるほど侮蔑的な表現ではないものもあるといえる。

作品内ではホームズを呼び戻したものの、華々しい活躍をさせず、ホームズに対する侮蔑的な表現を一部に混ぜたことから、彼の帰還を受け入れ切れていないドイルの迷いが表れているといえよう。そして、これは彼の作品内での死の扱い方の揺れに繋がっていると考えられる。自ら葬り去ったホームズを呼び戻すことは、死という苦痛に対する冒瀆であり、死者や靈魂に思いを馳せるようになったドイルにとって、死の扱い方に迷いがあつたのではないだろうか。しかし、死に対する考え方の揺らぎが表れているものの、やはり死を手段として用いている点が重要であり、ドイルが作品に表したのは自身の死生観そのものではなく、作品内で都合よく用いたものである。

本章では、『最後の事件』と『バスカヴィル家の犬』に表れるドイルの死生観を分析した。初めに、ドイルにはボーア戦争参加時は、死者に対するモラルの欠如がみられたが、戦争でトラウマを経験した後、心霊主義への興味の影響もあった結果、死者の苦しみに寄り添う考え方へ変化したと指摘した。次に、ボーア戦争前に発表された『最後の事件』を分析し、死者の描写に配慮がみられることを明らかにした。しかし、作品内で犯罪者を巻き添えにしてホームズを殺害した点に、自分の利益に基づいた死の利用がみられることから、死に対する配慮と死の濫用という矛盾した死への向き合い方が表れているといえた。最後に、『バスカヴィル家の犬』において、ホームズの正義感と、ホームズを帰還させたドイルの手法には、どちらにも自己都合的な死への捉え方が表れていることを明らかにした。ホームズの帰還を受け入れ切れない迷いは、ドイルの死に対する考え方の迷いに繋がっているといえよう。結果として、ドイル自身の死生観の変化に関係なく、彼の作品では一貫して死が利益に基づいて利用されていたと考えられる。

## 第2章 アガサ・クリスティ『オリエント急行の殺人』作品分析

本章では、前章で分析したドイルの死生観との比較対象となる、クリスティの『オリエント急行の殺人』に描かれる死生観を分析する。まず、クリスティの生涯に関して、特に戦争における篤志看護隊での経験に着目して死との接点を探求する。次に、『オリエント急行の殺人』における犯罪者の死の描写と死に対する乗客と乗務員の反応を整理する。最後に、作品のメッセージ性から作品内での死の用いられ方を分析する。これらを通してクリスティが作品に表す死生観を明らかにする。

### 第1節 アガサ・クリスティの生涯からみる死との関わり

本節では、クリスティの生涯から死との関わり方を分析する。特に、第一次世界大戦における篤志看護隊での経験と心霊主義への考え方をもとに、彼女の死生観が形成されたであろう背景を分析する。クリスティは第二次世界大戦以降も多くの作品を執筆しており、死生観の変化がみられる可能性は大いにある。しかし、『オリエント急行の殺人』は2つの大戦の戦間期に発表された作品であるため、本稿では第一次世界大戦のみを経験した時点のクリスティの死生観に絞って分析することを留意しておきたい。

ここではまず、クリスティの経歴を整理する。クリスティは1890年にイングランド南西部のデボン州トーキーで誕生した。少女時代は母の思想のため学校教育を受けることができず、母から直接教育を受けながら多くの本を読んで過ごした。第一次世界大戦の際に、彼女は篤志看護隊の一員として看護助手の仕事を経たのちに薬局助手となった。薬局で働いていた頃、探偵小説を書こうと思い立ち、私立探偵エルキュール・ポアロシリーズの第1作目となる『スタイルズ荘の怪事件』(1920)で小説家デビューを果たすと、シリーズ第3作目の『アクロイド殺し』(1926)で一躍有名となり、1934年にシリーズ第8作品目となる『オリエント急行の殺人』を出版した。生涯で66作品を発表し、そのうちポアロシリーズは長編と短編集合わせて33作品である。クリスティは聖書とシェイクスピアの次に読まれたともいわれるミステリの女王として、現在も世界に名を馳せている。

第一次世界大戦時にクリスティが従事した篤志看護隊は、女性たちが戦争に協力するために選ぶ最も一般的な手段であった。勤務を希望する女性が多かったため、当時「家庭の天使」と呼ばれていた中産階級の女性が看護に慣れていると捉えられ、優先的に採用されていた。しかし、現場の悲惨な状況に耐え切れず多くの女性が病院を去っていった。彼女らとは対照的に、クリスティは中産階級出身でありながらも仕事に真剣に向き合っていたことが、彼女の自伝に記述された篤志看護隊として従事した経験から指摘できよう。例えば、「わたしはアンダーソン主任看護婦の輩下になって幸いだった。彼女は手厳しかったが公正だった」(『自伝(上)』477-78)と、厳しさを嫌がるのではなく、厳しくても学ぶ姿勢を見せていたり、「看護が楽しかった…報いられることの多い職業だと思ったし、またずっとそう思っている。もしわたしが結婚しなかったら、戦争後に病院看護師としての訓練を受けていた」(『自伝(上)』478)と、死と触れ合う過酷な仕事を前向きに捉えて働き続けることを視野に

入っていたりと、看護に真剣になっていた様子を読み取れる。

さらに、解剖病理技師のヴァレンタインが、クリスティが発表した 66 作品のうち 41 作品の殺害方法は毒殺であると指摘しているように(322)、篤志看護隊での薬局助手としての経験が、作品内で薬や毒物が多くの人々の命を奪う所以となっていることがうかがえる。このことから、彼女の篤志看護隊での経験は作品内に色濃く表れていると推測できるだろう。クリスティが生み出したベルギー人の探偵ポアロのモデルが、彼女が戦争で出会ったベルギー人の亡命者である点からも、戦争経験が作品に影響を与えていることは明らかである。

英文学者の志渡岡は、クリスティの自伝から、彼女は看護の仕事にやりがいを感じていたと分析している。彼女が初めての手術の際に失神してしまった経験から、その恐怖への対処法を考え実行したことは、冷静な自己分析能力と、逃げ出さない意思や強い責任感、忍耐強さがあるとし、このような努力が彼女を逞しく他人の痛みがわかる看護師へと成長させたと論じている。加えて、志渡岡は自伝内で看護助手の仕事内容を説明する際、苦しむ兵士の姿が不自然なほどに描かれておらず、敢えてその描写を避け茶目っ気の多い兵士たちの姿を描くことで、重苦しさをユーモアで和らげていると指摘している(58-59)。実際に自伝では、兵士の苦しむ描写はみられず、食事表に落書きをする兵士の姿や、仮病でクリスティを騙そうとする兵士との会話が記述されており(『自伝(上)』 481)、病院内の重苦しい雰囲気を感じさせない表現になっていることがわかる。この他人の痛みに寄り添う力が、第一次世界大戦後の人々の苦しみの根源であった死を、探偵小説という娯楽作品に取り入れた力に繋がっているといえる。また、痛みの詳細な描写を避け、ユーモアを用いている点に、死やそれに近い苦しみに対する配慮を読み取ることができる。しかし、ユーモアを用いることは死を軽視していると捉えられかねないため、読者によって感じ取り方が変化する部分ではあるといえよう。

前章で確認したドイルがそうであったように、第一次世界大戦後、戦争で愛する者を失った多くの人々が心霊主義に慰めを求めていた。しかし、ミステリ作家のエドワーズは、クリスティは心霊主義に対して懐疑的な態度をとっていたと指摘している。彼は、『邪悪の家』(1932)において作者であるクリスティが、ポアロの相棒ヘイスティングに嫌々ながら偽の霊媒役を務めさせた点に、心霊主義への皮肉が表れていると論じている(159)。確かに、『邪悪の家』では、降霊会を演出する際にポアロが「喜劇を演じよう」(258)と滑稽な物言いをしていたり、ヘイスティングがポアロに霊媒師を演じるよう指示された際に、「どうしてそんな役を、と私は心のなかで叫んだ」(264)と霊媒師を受け入れない感情を表現していたりと、心霊主義を真剣なものとは捉えていないであろうクリスティの考えが彼らに投影されているといえる。この点に、死を合理的な現象として扱い、非科学的なものには傾倒しない彼女の冷静な態度が見受けられることから、主人公ポアロは作者であるクリスティの考えを色濃く反映しているといえるだろう。

## 第2節 『オリエント急行の殺人』における犯罪者の死とメッセージ性

本節では、前節で分析したクリスティの生涯における死との関わり方を踏まえて、彼女が作品に表す死生観を明らかにする。まず『オリエント急行の殺人』における犯罪者の死の描写及び死に対する乗客と乗務員、そして探偵ポアロの反応を整理する。次に、作品内に表れるメッセージ性から、作品での死の用いられ方を分析する。

### 第1項 犯罪者の死の描写と乗客らの反応

『オリエント急行の殺人』は1934年に発表された長編小説である。私立探偵エルキュール・ポアロシリーズの8作品目であり、クリスティの代表作の1つとして挙げられる。物語はポアロが乗客と乗務員合わせた13人の容疑者一人ひとりと、取り調べの会話をする場面が軸となって進行する。乗客ら12人が1回ずつ被害者のラチェットをナイフで刺したこと、そして13人全員が殺人に関与していることを解き明かしたポアロは、彼らの復讐心に理解を示し、犯罪を見逃して物語は終わる。本作品を取り上げる理由は、殺人を許すという結末はクリスティの他作品には見られない特徴であり、彼女の死生観が強く表れた作品だと推測されるためである。現に、この結末に関して、是非を問う様々な議論が展開されている。

まず初めに、被害者ラチェットの死の描写について検討する。ラチェットは、アームストロング誘拐事件という、作品内のアメリカで発生した幼女誘拐殺人事件の犯人である。この事件は1932年にアメリカで実際に発生したリンドバーグ愛児誘拐事件をモデルにしている。ラチェットは容疑者として裁判にかけられたが、莫大な金を用いて無罪放免となり外国を放浪中にオリエント急行に乗車した。列車の乗客らはみなアームストロング家と親交のある人々であり、列車内でのラチェットへの復讐殺人を企てていた。前節で、クリスティの作品には毒殺が多いと論じたが、本作品ではラチェットは刺殺死体として発見されている。死体はポアロと医師との会話によって以下のように描写されている。

「きれいな死に方ではありませんな」と言った。「何者かがここに立って、何度も刺したに違いない。正確には何カ所刺されていますか」

「わたしの調べたところでは、十二カ所です。ひとつかふたつは、かすり傷程度の浅いものです。その一方、致命傷と思われる傷が、少なくとも三カ所あります」(100)

上記引用部分以降の会話においても、死亡推定時刻や犯人の利き手、性別を特定するために傷口の形状を観察している会話が繰り返されているが、全体として冷静で端的に死体の様子が描かれていることが読み取れる。一方で、苦しみに歪んだ死体の顔や流れ出ている血の様子など、残酷でグロテスクな描写で読者の恐怖を誘うような表現は一切みられない。

解剖病理技師のヴァレンタインは、「クリスティの小説では、血なまぐさいディテールの描写を意図的かつ計画的に避け、被害者の目立つ特徴のみを特出して描くことで、読者に

想像の余地を多く残している。そしてそれがかえって恐ろしさを高めることもある」(14)と論じている。確かに残酷な描写の少なさは、作品を読んで推理をする読者に想像を促す効果があると考えられる。しかし、本稿ではこの効果に加えて、クリスティは残酷な死の状態を描かないことで死者への敬意を示していると指摘したい。その根拠として、ラチェットが睡眠薬を飲んだ状態で殺害されていたことが挙げられる。これは、被害者が刺殺の痛みを苦しまないように睡眠薬を飲ませてあげたという、クリスティによる死者への配慮であると解釈できるのではないだろうか。

死体に関する描写とは別に、死そのものに対してポアロが意見している場面がある。殺人事件発生前に、オリエント急行の重役ブークとの会話において、ポアロは「あなたの立場からすれば、事故など起きたら大変でしょうな、確かに。だが、ほんのいつときだけ、そう仮定してみましょう。その場合は、たぶん、ここにいるすべての人が結びつけられることになる——死という絆によって」(45)と発言している。この発言は死という苦しみの根源を、絆という綺麗で前向きな言葉に置き換えていると解釈でき、この点にもクリスティの死という残酷なものを扱うことへの配慮があると捉えられる。

続いて、ラチェットの死に対する、乗客と乗務員ら 13 人の容疑者とポアロの反応を整理する。注目すべき点は、全員がラチェットの死に対して肯定的な点である。ポアロが容疑者一人ひとりの取り調べを行う際、13 人がそれぞれラチェットの死に対して多種多様な反応を見せるが、全員に一貫してラチェットの死を喜んでいる様子が読み取れる。そのうち、印象的な発言をした人物を、2 人取り上げて整理しよう。

1 人目は、ラチェットの秘書マックイーンである。彼は最初に訃報を聞いた時には、ショックを受けた様子も悲しむ様子も見せなかったが(86)、ラチェットが誘拐殺人犯だと知ると怒りを顔に表して、殺されて当然であり、自分の手で殺してやりたかったという旨の発言をしている点から(134)、激怒している様子が明確に示されている。他にも半数以上の乗客がマックイーンと同様に、ラチェットに対する殺意がこもった怒りを露わにしていることから、死を悲しむなどの弔いの感情がないことが読み取れる。2 人目は、作品内で唯一、殺人を褒めたロシアの侯爵夫人ドラゴミロフである。彼女はラチェットの正体を聞くと眉を寄せて背筋を伸ばし、「今回の殺人はまことにあっぱれなこと」(185)と、称賛の意を示している。彼女の犯罪を褒める行為は非道徳的だと捉えられうるが、作品全体を通してラチェットの死が喜ばれているため、殺人への称賛も当然の反応としてポアロたちは受け入れている。誰一人としてラチェットの死を悲しんだり同情したりする者がいない様子から、本作品が犯罪者の死を肯定しているともいえる。全員が犯人であるのだから、その死を肯定するのは当然とも考えられるが、探偵相手に殺人の当然性を隠さずに語っている点において、その考え方が当たり前かのように読者に伝わってしまう懸念がある。

乗客の反応に加えて、ラチェットの死へのポアロの反応を取り上げる。ポアロは、ラチェットが犯罪者だと知った際のブークの「殺されても気の毒とは思えませんな」(118)という発言に対して、「同感です」(118)と返答している。このことからポアロは、他の乗客たち、

つまり殺人犯らと同様に犯罪者の死は正当だと意見していると読み取ることができ、この考え方を主人公の探偵が示すことで、本作品は犯罪者に対する殺人行為を正当化しているといえる。よって、クリスティが作品内で死者への敬意を示していた点と、死者を生み出す行為を肯定している点に、死に対する考え方の矛盾がみられる。この矛盾は次項で検討する。

## 第2項 死を用いたメッセージの伝達

ここからは、本作品に含まれているクリスティの司法制度に対するメッセージ性から、作品内での死の用いられ方を検討する。本作品は、ポアロが犯人ら13人の罪を許すという選択を取って結末を迎える。この結末に関して英文学者のグリペンベルクは、「小説の結末でアガサは、私的裁判を承認できるものとして受け入れているが、これにより、正義とは法の正義ばかりでないというアガサの立場が明確になっている」(148)と論じている。彼女が論じる通り、本作品にはクリスティの正義や法に対する考え方やメッセージが色濃く埋め込まれていると考えられる。なぜならば、本作品の結末で誘拐殺人犯に対して電車内という法の外で裁判を行い、乗客らの殺人によって死刑を執行している点から、法外の正義の重要性を指摘するクリスティの考えが表れていると捉えられるためである。また、この結末から本作品において電車は、裁判所かつ死刑執行所として機能しているといえる。ここではまず、本作品に含まれる彼女からの問いかけを指摘する。続いて、結末におけるポアロの立場に対する2つの議論の是非を検討し、最後にクリスティの考えが特に強く表れている人物を分析する。これらを通して、法外での死刑執行を黙認したポアロの行動や、本作品のメッセージ性から、クリスティの作品に表れる死生観を導き出す。

まず、クリスティからの問いかけを代弁している人物としてイギリス人のアーバスノット大佐を取り上げる。彼はラチェットが殺人犯であると知った際、他の乗客らと同様に彼の死を肯定したものの、以下のようにも意見している。

「わたしに言わせれば、極悪人が当然の報いを受けたまでのことだ。もつとも、裁判にかけられて絞首刑になるほうがよかったと思うが。いや、アメリカだと電気椅子だったかな」

「すると、アーバスノット大佐、個人的な復讐よりも、法と秩序に従うほうがいいとお考えですか」

「コルシカ人やマフィアのように、血みどろの復讐を繰り返したり、刺し殺したりするわけにもいくまい」大佐は言った。「誰がなんと言おうと、陪審による裁判こそが健全な制度というものだ」(207)

上記引用部分において、アーバスノット大佐は法に則り裁判を行うことが正当だと主張している。これは、復讐殺人という方法で、犯罪者に裁きを下した乗客らの行動を批判するものである。さらに、陪審による裁判を重視している点において、法律の専門外である市民の

意見を取り入れることの重要性も主張している。しかし、彼も復讐殺人を実行した犯人の1人であるため、上記の発言は彼の本心ではなく、作者であるクリスティからの問いかけとは考えられないだろうか。犯罪者の殺人という死を扱うことによって、殺人者が法外で死刑執行されることを肯定する他の乗客らと、法に従った裁きが正しいとするアーバスノット大佐という対比した意見を持つ人物を登場させ、読者に本当の正義というものを考えさせるきっかけを与えている。

次に、本作品における殺人の見逃しについて展開されている議論に関して、特にポアロの立ち位置を論じた2つの代表的な主張を取り上げ検討する。社会心理学者の **Chakraborty** は、ポアロは裁判官の役割であると主張している。彼女によれば、本作品ではポアロが究極の倫理観を持つ裁判官として登場し、乗客はそれぞれ応報的な裁判を行う陪審員となっている。ポアロは、犯罪者ラチェットが司法制度を逃れたことは違反だという判断に基づいて殺人犯らを釈放しており、司法制度外でラチェットのような犯罪者を殺すことは、凶悪犯罪を未然に防いだとされ、司法制度を正すこととみなされると、彼女は論じている(193)。彼女の主張の通り、警察がいない密室の列車内で、私立探偵であるポアロは、列車の重役ブークから警察の代わりに犯人を突き止めるよう依頼されている点から(80)、事件現場で法を執行する警察の代役として、ポアロは法の執行者に限りなく近い存在に位置づけられていると解釈できよう。そのポアロが、殺人を許すという決断を下したことから、本作品ではそれが本来の法として正しいという考えに誘導しようとしているのではないだろうか。作品内でラチェットが無罪放免になり外国を放浪していた件に関して、ポアロが「要領よく逃げださなかったら、人々からリンチにあっていたことでしょう」(117)と批判的に意見している点からも、現状の司法制度を問題視していることが読み取れる。しかし、法に反した殺人事件の隠蔽を行っている時点で、法に従順な裁判官としての任務を果たしていないとも指摘できよう。

一方で文学研究者の **Gulddal** は、ポアロは陰謀に加担した犯人の1人であると主張している。4人の目撃者がそれぞれ、女性のような声の小柄な男が、小さな口髭を生やしフランス語を話したのを見たという報告を、ポアロは捜査を錯乱させるための虚偽の目撃証言だと結論付けるが、この人物像はポアロに完璧に当てはまっている。しかし、ポアロはこの証言が彼自身を指しているという点に気付いていない。以上より、ポアロは陰謀に加担しており、犯罪を見逃がすだけでなく、自分も疑惑を逃れるための巧妙な解決策を編み出した結末であると **Gulddal** は主張している(16-18)。彼が論じる通り、目撃証言の特徴はポアロに当てはまるものであり、上記の主張は非常に興味深い推理である。謎の人物の目撃情報をポアロに当てはめたことで、直接手を下していない彼も殺人事件を隠蔽した点において法を犯した犯罪者とみなすことが可能であろう。

クリスティは『オリエン特急の殺人』を発表した時期に、自伝内で「重要なのは潔白であって罪ではない」(『自伝(下)』 332)と意見しているように、法律を通して下される判断は重視しておらず、陪審のような一般市民の目から見る事実をもとに下された潔白という

要素が正しい正義であると捉えていると推測できる。法から逸脱してしまった時点でポアロは殺人犯の一味となっているが、法に従った正義が本当に正しいのか、探偵という法に近い存在であるポアロをあえて犯罪者側に引き入れることで、クリスティの問いかけがより強固なものとなっていると考えられる。ポアロが復讐殺人を許すことは、クリスティが現実社会の法制度の不備を指摘し、殺人者には死相応の処罰が必要だと主張していることと同意ではないだろうか。

前項で指摘したように、クリスティの作品には死者に対する配慮と、死を報復の手段として利用しているという矛盾があるといえる。この矛盾を検討するために、クリスティの思想が強く表れていると考えられる、乗客のシュミットというドイツ人メイドを取り上げて分析する。彼女がラチェットに殺害された子どもを想って涙目になっている様子は、「強い母性本能を揺さぶられたのだろう」(248)と描写されている。この点から、彼女はラチェットの死には関心を示しておらず、被害者に思いを寄せていることがわかる。この母性本能は、母であるクリスティが、アームストロング誘拐事件のモデルであるリンドバーグ愛児誘拐事件に対して抱いた気持ちを映し出しているとは考えられないだろうか。さらに、クリスティは自伝において、『オリエント急行の殺人』を発表した時期の記述と近い場面で、以下のように語っている。

たとえば、小さなタバコ屋のかよわい老女が、タバコの包みを若い悪党のために取ってやろうと後ろむきになったところを襲われ撲殺されたとする。誰もこの老女の恐怖と苦痛、そして最後のあわれな無意識状態のことは気につけないかのようなものである。誰も犠牲者の苦しみのことを口にする者はない、ただ、人は殺人者が若いということに、あわれみを寄せるのである。なぜ彼を死刑にしないのか？この国では昔オオカミの命を奪っていた、オオカミに羊と一緒に寝ることを教え込もうとはしなかった…そしてわたしたちは彼らを殺した。(『自伝(下)』 333)

上記から、クリスティは犯罪者よりも犠牲者に関心を持って寄り添っていることと、殺人者の死刑に肯定的であることが読み取れる。シュミットが持つ感情に母性が表れている点と、加害者より被害者に感情を向けている点において、彼女とクリスティの思考は非常に似ており、シュミットはクリスティの考え方を投影した人物であるといえる。クリスティが被害者に寄り添い、加害者には死相応の処罰を求めている点から、被害者としてのラチェットには死者に対する敬意を示し、加害者としてのラチェットには死の報復を与えていると捉えられる。そのため、死への配慮と死の利用という矛盾した状態が生じていると考えられる。

本章では、クリスティの『オリエント急行の殺人』に表れる死生観を分析した。初めに、クリスティは第一次世界大戦での経験から他人の痛みへ寄り添う力を身に着け、作品内での死の詳細な描写を避ける配慮を表していることに加え、彼女の思想は作品内に色濃く表れていることを明らかにした。続いて、『オリエント急行の殺人』では死に対する曖昧な描

写や死者への敬意が表れていることと、犯罪者殺害を正当化している描写が多くあることを指摘した。最後に、クリスティは作品内で法制度に対する問題性の主張と、読者の考える正義についての問いかけを行っており、作品で殺人という題材を扱うことでメッセージを伝えるきっかけとしていた。クリスティは死者への配慮や敬意を表しているものの、犯罪者に対しては死という処罰を望んでいる点から、命を落とす人間によって死生観に基づいて対応を変えている。以上より、彼女は作品内で死をメッセージ伝達のきっかけとしており、作品を通じて死に意味を与えているといえる。

### 第3章 コナン・ドイルとアガサ・クリスティの死生観

第1章ではドイルの、第2章ではクリスティの作品に表れる死生観を分析した。本章では前章までの分析を踏まえ、ドイルとクリスティの死生観の比較分析を行う。比較分析に入る前にまず、イギリス社会における探偵小説の立ち位置の推移に関して整理する。次に、ドイルとクリスティが作品に表した死生観の比較を行う。最後に、比較分析した死生観を踏まえて、当時と現代のイギリス社会における、探偵小説に描かれる死生観の意義を見出す。

#### 第1節 逃避文学としての探偵小説

前章まではドイルとクリスティのそれぞれの経験や作品をもとに死生観を検討してきた。本節では時代背景をもとに、探偵小説を読者の視点から概観することで、そこに描かれる死に対して社会が求めていたものと、実際に探偵小説が社会にもたらしたものを明らかにする。これにより本章第3節で、現代のイギリス社会において、探偵小説に描かれる死生観の意義を見出すことにつなげる。本節では、分析対象をドイルとクリスティが活躍した時代に限定し、かつ死の恐怖や苦しみからの逃避という観点に絞って、探偵小説とその読者に関する変遷を検討する。

まず、ホームズシリーズ第1作目が出版された1887年から第一次世界大戦前まで、つまり19世紀末から20世紀初頭の時代について整理する。19世紀末のロンドンには産業革命の影響で貧富の差が激しくなり、犯罪が増加していた。急速に発展する社会への混乱や貧困が生み出した犯罪などに、不安を抱える人々は少なくなかったと推測できよう。さらに、1888年にロンドンに出没した切り裂きジャックと呼ばれる連続殺人犯により、ロンドン中は恐怖に陥れられていた。恐怖に震えた社会は、ホームズという殺人事件に刺激を覚えて命に関わるような危険を好む架空の探偵に何を求めていたのだろうか。英文学者の宮地はこの疑問に関して、ホームズは不可解な事件を説明可能な形に還元することで、漠然とした恐怖を社会から取り除くという社会秩序の維持に貢献する大衆のヒーローになっていたと論じている(72)。解決が困難な貧困や、未解決の切り裂きジャック事件が国民に不安な感情をもたらしていたのに対し、ホームズはワトソンが発表した作品内の事件では必ず事件の真相にたどり着いていたため、確実に死の恐怖を取り除いてくれるヒーローのような安心感が読者に与えられていたことは確かであろう。ホームズが死の恐怖から守ってくれるという絶対的な安心感が、例えフィクションであろうとも、社会秩序を支える柱の1つになっていたと推測できる。

一方、歴史家のワースリーは、宮地と同様にホームズが社会に安堵をもたらす存在であったと主張したうえで、同時にホームズは正義に没入するあまり思慮を欠いて危険な行動を取るため、刺激に富み心掻き立てる読書体験を提供してくれると論じている(178)。『最後の事件』を例に考えると、敵に襲われると予測しながらも滝という危険な場所で1人になったり、『バスカヴィル家の犬』では、謎を解くために依頼人をおとりに使い命の危機にさらされていたりなど、危険な行動を取っていることは確かである。しかし、絶対に真相にたど

り着くという安心感があるホームズだからこそ、危険な行いも心地よい刺激として読者が受け取ることができていたと考えられる。

次に、クリスティが登場した探偵小説の黄金時代について検討する。黄金時代は 2 つの大戦間の時期を指しており、クリスティをはじめとした多くの探偵小説家が登場した。この時代は第一次世界大戦で初めての身近な大量死を経験した国民が生きており、探偵小説がその苦痛を慰める逃避文学として機能していたことは、英国経済史学者の高橋をはじめ、多くの学者が論じている。高橋は、両大戦間の不安の時代には、暗い現実を生々しく映し出すものやつらい気持ちに陥る読み物を嫌い、血の匂いのしない、半ば現実離れした殺人ゲームが逃避文学として愛好されたと論じている(63)。この時代の人々が不安を煽るような作品を嫌ったことは容易に想像できるが、死への慰めのために現実離れしたゲームが好まれたのであれば、それが殺人である必要はあったのであろうか。苦痛を慰める文学が、戦争で人々に苦しみを与えた死を娯楽化したものである必要はあるのだろうかという疑問が生じる。

この疑問の回答になるような論を、小説家の笠井は、綿密な犯行計画によって殺害された被害者は、戦場で偶然のように殺された無数の死者よりもはるかに「人間的」に扱われており、その被害者の屍体は、犯人の行為を再現し追体験する探偵の推理によって、第二の光輪を与えられているとして展開している(75)。この論に従うとするならば、戦争で無差別に殺害された者たちに、フィクションの作品内でその死に意味を与えることで、彼らへの追悼の意が探偵小説に込められていることとなる。これは逃避文学に殺人の要素が求められた理由といえるだろう。戦争で唐突に意味もなく大事な人を失った人々は、その悲しみの拠り所を求めており、探偵小説が十分に逃避的な機能を果たしていたと考えられる。

また、1930年にディテクション・クラブという、黄金時代の著名な探偵小説家が集まる社交的な団体が発足された。このクラブの産物として忘れてはならないものが、フェア・プレーという考え方である。クラブでは、探偵小説に関わる様々なルールが作家たちの間で独自に制作されており、その1つがフェア・プレーであった。これは、読者をスポーツの対戦相手に例え、読者には重要な事実が全て説明され、作品内の探偵と同等に真相にたどり着く機会が与えられることが必要とされるものである。

フェア・プレーの有無は、ドイルとクリスティの作品の決定的な違いの1つであるといえる。黄金時代のクリスティの作品では、読者にも探偵が入手している情報がわかりやすいように提示されている。例えば『オリエント急行の殺人』には、車両の見取り図や容疑者全員の特徴を箇条書きにまとめたメモなどが作品に組み込まれており、読者が情報を整理しやすくなっている。一方、フェア・プレーの誕生以前に最も活躍したドイルの作品では、クリスティ作品のような情報の整理などはみられない。さらに、『バスカヴィル家の犬』を例に挙げると、本作品における死因の解明は、被害者は魔犬が襲い掛かってきた数秒で心臓発作を起こして亡くなり、死体に興味がない魔犬は被害者に噛みつかなかったと結論付けられている。これは物的証拠がなく非科学的で釈然としない推理であり、読者に推理をさせる気がないようにさえ思われる。よって、ドイルの作品はホームズが推理する姿を読者が楽し

む作品であり、クリスティの作品は探偵と共に読者が推理を楽しむ作品であるといえるだろう。

上記から、それぞれの時代に存在した死にまつわる恐怖からの逃避場所として探偵小説は求められていたが、その受け取り方は変化していたと考えられる。漠然とした死に関する不安から逃げるためにホームズの活躍を見て安堵していた時代から、体感した死の恐怖から逃れるために自らも死をもたらすものの解決に参加する時代へ変化したといえる。

## 第2節 ドイルとクリスティが作品に表す死生観の比較

前節では読者の視点から、探偵小説に描かれる死に求められるものとその影響を検討し、時代によるそれらの差異を明らかにした。本節では、第1章と第2章で行った『最後の事件』、『バスカヴィル家の犬』と『オリエント急行の殺人』の作品分析をもとに、ドイルとクリスティが作品に表した死に関する描写の共通点と相違点を明らかにすることで、2人の死生観の比較分析を行う。本章第1節と本節での分析をもとに、次節でイギリス社会における探偵小説の意義を明らかにすることを試みる。

初めに、2人の共通点を2点指摘しよう。1点目は、死者に対する配慮が表れている点である。本稿で扱った全ての作品において死の描写を分析したが、死にゆく様子や死体を詳細に語る表現、恐怖を誘う残虐な言葉は見当たらなかった。このような死の曖昧な描写や死者への配慮が、死という苦しみの根源であるものを娯楽化し、消費物である小説に落とし込むことができた所以であったといえるだろう。

2点目の共通点として、犯罪者の死を肯定していることが挙げられる。ドイルの『最後の事件』では、モリアーティ教授を捕らえることではなくこの世から葬り去ることが事件解決になるというホームズの意見が主張されていた。また、『バスカヴィル家の犬』ではホームズが脱獄囚の死を喜ぶ姿が描かれていたことに加え、犯人の死による事件解決に納得を示していたことから、犯罪者の死の当然性が表現されていた。さらにクリスティの『オリエント急行の殺人』では、乗客ら及び探偵ポアロが誘拐殺人犯の死を肯定する態度と、誘拐殺人犯に法外での死刑を執行して探偵がそれを黙認する結末を迎えるという物語の筋書きから、作品全体として犯罪者の死を正当化しているものと解釈できよう。しかし、2人が犯罪者の死を肯定する理由は異なっている。ドイルはモリアーティ教授の死をホームズ殺害の罪悪感の軽減に用いたり、ホームズが犯罪者の死に大きな興味を示していなかったりしているだけで、犯罪者は死に値するという強い考えは読み取れず、あくまで死んでも構わないという姿勢をもつと解釈できる。一方、クリスティは法制度や正義感といった観点から、社会的に犯罪者の死を正当なもののみなしているといえる。

上記の2点の共通点は、死者への配慮の気持ちがあるにも関わらず、犯罪者を作品内で殺害することによって死者を生み出しており、矛盾がみられる。これは2人ともが共通して犯罪者としての姿には死の報復を、被害者としての姿には死者への敬意を表しており、死生観に基づいて対象者によって死との関わり方が変化している様子の表れであると考えら

れる。

続いて2人の相違点として、作品内での死の扱い方に関して論じよう。第1章で論じたように、ドイルは死を自己都合で利用している。自身の興味関心とアイデンティティの維持のために、死を用いてホームズ作品に終止符を打ったはずのドイルが、その死を撤回してホームズを帰還させたことは都合の良い行為であり、痛みや苦しみを伴う死というものを軽率に扱っていると捉えられる。さらに、ドイルが創造したホームズも自己中心的に死とかわわっている。第1章第2節で検討したように、ホームズは殺人などの死を伴うこともある事件は自分の人生に刺激を与えてくれるものだと捉えていた。『バスカヴィル家の犬』では依頼人であるヘンリー卿の命や精神よりも事件解決を優先するなど、他者よりも自分の興味関心を優先して死と関わっている。ホームズが「事件に成功した裏には、ヘンリー卿の大きな犠牲があったけれど、あの病状も一時的なもの」(311)と主張しているように、犠牲は仕方のないものと割り切っている様子からも、彼にとって命の危機に関わる犠牲は深刻な要素ではないことがわかる。ホームズ作品において死が自己都合的に用いられていることから、ドイルが死を通して伝えたいメッセージはないように思われる。

一方、前章で分析した通り、クリスティは犯罪者の死を通して自身の考えを社会へ訴えていた点から、作品で死を扱うことによって死というものに意味を付与していたといえる。『オリエント急行の殺人』では、誘拐殺人犯に法外での死刑を執行することで、当時の法制度の正当性や本当の正義とは何かという疑問を読者に投げかけていた。クリスティは、法外での死刑執行を黙認する結末を選択したという点から、法に捉われない正義が存在すると考えていたと捉えてよいだろう。小説家の有栖川は、この結末はミステリファンが何とはなしに抱いている結末の枠組みをあっさり破壊した「掟破り」であると論じている(412)。確かに、前節で言及した探偵小説に関わるルールの中には、作品内で犯人は必ず逮捕され、罪をうけるべきといった内容のものもあるため、クリスティは掟を破ったといえる。しかし、これには掟を破ってでも伝えたいものがあるというクリスティの意思の強さが表れていることに加え、掟を破って社会に衝撃を与えることで、より彼女の意見が強調される効果が生まれている。よって、ドイルの作品と比べてクリスティが描く死には強いメッセージ性が含まれているといえる。

犯罪者の死にも、その犯罪者が生み出した被害者の関係者の心を救うという点では意味があり、この考え方をするとドイル作品の死にも意味が付与されていると捉えることは可能である。しかし、前章の第2節第2項で分析したように、クリスティの作品内には被害者への寄り添いの気持ちがあったことに対し、ドイルは死者への弔いの描写は少なく、むしろ前述の通り被害者の死はホームズの好奇心を刺激するものとして描かれている。このことから、ドイルは犯罪者の死に関してその犯罪者が生み出した被害者の気持ちまでは作品内で配慮していなかったと考えてよいだろう。以上より、ドイルが作品に表す死生観は、死者への配慮を示しつつも死を自分の利益に基づいて都合よく捉えているものであり、死を手段として表現している。対して、クリスティが作品に表す死生観は、ドイルと同様に死者

への配慮を示しつつ、死を扱うことで死そのものに意味を与え、死というものに価値を見出すものである。

### 第3節 イギリス社会における探偵小説の意義

本節では、2人の作品が出版された当時のイギリス社会での探偵小説の意義と、現代のイギリス社会の探偵小説の意義を、死生観の観点から明らかにする。まず、本章第1節で確認した、当時の社会が探偵小説に描かれる死に求めているものと、前節で明らかにした、2人が実際に作品に表した死生観を照らし合わせて分析する。次に、イギリスの現代社会における探偵小説の意義を、現代のイギリスの死に関わる問題を取り上げて考察する。

初めに、本章第2節でまとめた死生観を、同じく本章第1節で分析した、読者が作品内の死に求めているものと照らし合わせてみる。ドイルの時代では、読者は探偵小説に社会への漠然とした不安から安心感を求めていることに加え、自分には決して襲い掛かることのない刺激を求めている。ドイルが描く、死者に敬意を示しながらも自己利益に基づき用いられる死の表現は過激と捉えられる可能性もあるが、ホームズの絶対的なヒーロー性により、確実な解決がもたらされることから刺激と安心感を同時に提供していたため、読者の需要に適していたといえる。一方、クリスティが活躍した2つの大戦の戦間期の時代は、大量死の慰めとして死者への寄り添いや、無差別な大量死の被害にあった者たちの死を意味あるものにするのが求められていた。クリスティも死者への敬意や寄り添いの心を作品内で示していたとともに、作品に描く死にメッセージ性を持たせていたことから、死そのものに意味を見出しており、彼女が示した死生観もドイルと同様に読者の求めるものであったといえる。よって、2人が作品に表す死生観は時代に適応していたものであった。

2人の作品は現在でも世界中で人気を集めている。死を扱う作品が現代でも親しまれているのは、そこに表される死生観が現代で何らかの意義を持つからではないだろうか。現在も、戦争やテロリズム、自殺、安楽死など、死に関わる問題は多く存在する。ここではその中から自殺を取り上げて、身近な人が自殺をして残された人に焦点を当て、探偵小説に表される死生観との関わりを論じる。自殺を扱う理由は、本稿で扱った戦争と自殺には、死別を経験した人の精神的苦痛に共通点があると考えられるためである。自殺には様々な原因が挙げられるが、その理由には言及せず、死別を経験した人に絞って検討する。なぜなら、自殺をした本当の原因は当事者にしか理解できないためである。また、死に関する問題は世界各国に存在するが、本稿ではイギリスの探偵小説を扱ったため、イギリスに絞って分析する。

まず、イギリスの自殺に関する現状を簡単に整理する。Office for National Statistics による、イングランドとウェールズの自殺者に関する調査によると、2024年に人口10万人当たり11.4人が自殺している(Main points)。また、2010年は人口10万人当たり9.6人が自殺しているが、以降14年間で自殺率は10人前後を推移しており一定した数値を保っている(Suicides occurring in England and Wales)。一方、厚生労働省と警察庁の調査によれば、2024年に日本では人口10万人当たり22.9人が自殺しており(7)、この数値と比べると

イギリスの自殺率は小さいことがわかる。しかし、自殺率に関わらず、世界的に自殺は決して無視してはならない問題である。自殺者がいるということは、身近な人を自殺で失い苦しむ人々は自殺者数よりも多く存在すると推測される。身近な人の死は死生観に影響を与え、自らの死を望むなど負の方向へと向く可能性がある。GOV.UKによると、自殺によって死別した家族、友人、知人は、一般の人々と比べ、最大で3倍の自殺リスクがある可能性があり、死別した人々への効果的かつ迅速な支援が不可欠だと指摘している(Providing timely and effective bereavement support)。また、イギリス政府は、2012年に最新の自殺予防戦略を発表し、優先行動分野を定め、その事項の1つとして、自殺の影響を受けた人々への死別支援の提供を明記している。遺族のケアを考えている点は、第2章で検討した被害者の痛みに寄り添うクリスティ的な死生観に類似している部分があるともいえるだろう。イギリスは、自殺によって死別を経験した人々を支援する重要性を示していることから、彼らへの寄り添いを重要視しているといえよう。

本稿で取り上げた戦争と自殺の共通点は、家族や友人など身近な人の死の責任や憎しみを投げかける場がない点だと捉えられる。この行方不明になった死の責任の行き場を、探偵小説に描写される死が担うことができると考えられる。戦争という大量死の被害にあった者の遺族は、亡くなった者の顔を見ることさえ叶わないなど、通常の死とは異なった対応に、追悼の心やその憎しみの行き場に悩んだであろう。この点に関して英国経済史学者の高橋は、探偵小説は「悪事を働いた犯人がちゃんと罰せられ、読者の正義感が満足させられる」(95)と論じている。戦争という無差別犯罪で親しい人を突然失った人々が、その死の追悼先や責任を問う場所が迷子になることとは反対に、犯人が明らかにされる探偵小説は、戦争での苦しみの心の拠り所として機能していたと解釈できよう。

これは、自殺による死別を経験した人も同様であると推測される。精神医学者のApplebyによると、自殺で誰かを亡くした人々の話は悲劇的であり、彼らは自分たちにもっとできることがなかったのかという痛烈な質問を投げかけてくるという(Foreword: Professor Sir Louis Appleby)。これに従うと、遺族は自分たちの行動を悔やみ、悲痛な嘆きをしていると想像できる。また、死別を経験した人々が、他者に自分がどうすべきだったのかという質問を投げかけている点から、人に助けを求めているとも解釈することができよう。もし親しい人が殺害されたとしたら、その悲しみや死の責任は犯人に向けることで緩和される。しかし、自殺であれば憎しみを向ける対象がなく、自殺を防げなかった罪悪感などから遺族が自分自身を恨んでしまう心理描写が働き、精神的に追い詰められたり、後追い自殺をしてしまったりと、自らを苦しめうると考えられる。これとは対照的に、死者へ寄り添い、悪人が確実に罰せられ、被害者の死に意味をもたらしてくれる探偵小説は、世界大戦の時代に逃避的な作用を持ち合わせていたように、自殺者遺族に逃避的作用をもたらすことができるといえる。かつて戦争の苦しみから、死を扱う作品に癒しを求めていたイギリス社会では、現代でも探偵小説に描かれる死生観に、死別経験者への寄り添いを見出せるのではないだろうか。

本章では、第1章と第2章での分析を踏まえて2人が作品に表す死生観の比較を行った

うえで、イギリス社会における探偵小説の意義について論じた。初めに、社会が探偵小説に描かれる死に求めていたものを検討した。その結果、ドイルの時代では絶対に死の真相を解き明かす安心感に加え、決して自分に降りかかることのない刺激が求められていたことに対し、クリスティの時代は大量死を体験した人の心の慰めや、大量死の責任の行き場が求められていたことが明らかになった。続いて、2人が作品に表す死生観の比較分析を行った。両者の共通点として、死者に対する配慮と犯罪者の死の正当性が描かれていたが、死を肯定する理由には差異がみられた。一方、相違点として、ドイルは死を自己都合で利用していたのに対し、クリスティは作品に死を表すことを通して社会へのメッセージや死そのものへの意味付けを行っていたことが明らかになった。最後に、探偵小説に表される死がもつ社会への意義を考察し、探偵小説は死を扱うことで生きる希望を見出していることを明らかにした。

## 終章

イギリスの探偵小説家として代表的なコナン・ドイルとアガサ・クリスティは、共に戦争という大量死を経験しながらも、探偵小説という娯楽作品で死を扱っていた。2人は様々な先行研究で対比的に、もしくは類似的に比較研究されているが、探偵小説の大きな題材である死に着目している研究は非常に少ない。そこで本稿では、両者が作品に表す死生観の比較分析を行い、共通点と相違点を明らかにすることを主題とした。そのうえで、現代のイギリス社会における、探偵小説に描かれる死生観の意義を見出すことを目的とした。研究方法として、コナン・ドイルの『最後の事件』と『バスカヴィル家の犬』、そしてアガサ・クリスティの『オリエント急行の殺人』に関して、作家の死にまつわる経験をもとに、死の描写や死の用いられ方から、作品に表れる死生観の比較分析を行った。

第1章では、コナン・ドイルの『最後の事件』と『バスカヴィル家の犬』に表れる死生観を考察した。まず、ドイルの死や死にまつわるトラウマに対するモラルの曖昧さと、戦争の前後で死生観に変化の可能性があることを指摘した。続いて『最後の事件』の作品分析を行い、死の曖昧な描写と、自分の利益に基づいた死の利用から、死への向き合い方の矛盾があると推察した。最後に『バスカヴィル家の犬』を分析し、死の描写に配慮があるものの、犯罪者の死を正当化している作品であり、ホームズの正義感よりも自己利益に基づいていることと、ドイルがホームズを帰還させた点にも自己都合的な死の使用が見られることを明らかにした。ドイル自身の死生観は戦争などを通じた変化があるが、彼が作品に表す死生観には大きな変化はなく、一貫して死を利用しているといえる。

第2章では、アガサ・クリスティの『オリエント急行の殺人』に表れる死生観を考察した。初めに、クリスティは主に戦争と篤志看護隊での経験を通じて、死や苦しみに対する配慮の心を培ったことを明らかにした。そして、『オリエント急行の殺人』の作品分析を行い、死者への敬意が表れているが、犯罪者の死を肯定している描写が多くある点から、死の対象者によって死生観に基づき対応を変化させていることを指摘した。さらに、作品内で死を扱うことにより社会へのメッセージを伝達していたことから、作品を通して死に意味を与えていると推察できた。

第3章では、ドイルとクリスティの死生観の比較と、探偵小説に表れる死生観と社会との関係性を探求した。まず、探偵小説に描かれる死に対して、ドイルの時代には絶対に死の真相を解き明かす安心感と、自分に降りかかることのない刺激が求められていたが、クリスティの時代では大量死を体験した人の心の慰めや、大量死の責任の行き場が求められていたことを明らかにした。次に、2人の死生観の比較を行い、共通して死の描写に配慮がみられ、死者への敬意が表れていたことに加え、犯罪者の死を肯定している表現があるが、その肯定の理由には差異があることを指摘した。相違点として、ドイルは死を自分の利益に基づき手段として利用していたことに対し、クリスティは作品に死を表すことを通して社会へのメッセージを伝達することにより、死を意味あるものにしていくことを明らかにした。最後に、探偵小説に描かれる死生観は2人が活躍した時代で求められていた死生観に適応し

ているだけでなく、現代のイギリスにおいても意義があることを示した。

結論として、ドイルは死への配慮の描写があるものの、作品内で死を自己都合的に使用しているのに対し、クリスティは死への配慮を示しつつ、作品内で死を表すことでメッセージを伝える媒体としており、死に意味を与えていたといえる。加えて、2人が活躍した時代だけでなく現代のイギリスにおいても、探偵小説は身近な人の死を経験して残された人々の逃避文学として作用することができる結論付けた。死を娯楽作品に取り入れることは決して死への冒瀆などではなく、むしろ人々に生きる意味を与えているものである。本稿の意義は、先行研究の少ない、死生観という観点に絞ってドイルとクリスティの作品を比較分析することで共通点と相違点を明らかにしたことである。加えて、死に対する不安が蔓延る現代社会において、身近な人の死との向き合う手段として、探偵小説に表される死生観の意義を示せたといえるだろう。

## 参考文献一覧

- Appleby, Louis. "Foreword: Professor Sir Louis Appleby." *Suicide prevention in England: 5-year cross-sector strategy*, GOV.UK, 11 Sep. 2023, <https://www.gov.uk/government/publications/suicide-prevention-strategy-for-england-2023-to-2028/suicide-prevention-in-england-5-year-cross-sector-strategy#foreword-maria-caulfield-mp>.
- Balcells, Miquel. "Medical and neurological references in the Sherlock Holmes stories." *Neurosciences and History*, Vol 1, No 3, 2013, pp. 137-43.
- Chakraborty, Rituparna. "Crime and punishment: Re-reading Agatha Christie's novel murder on the orient express." *International Journal of Advanced Academic Studies*, Vol. 4, No. 2, 2022, pp. 190-95.
- GOV.UK. "Providing timely and effective bereavement support." *Suicide prevention in England: 5-year cross-sector strategy*, 11 Sep. 2023, <https://www.gov.uk/government/publications/suicide-prevention-strategy-for-england-2023-to-2028/suicide-prevention-in-england-5-year-cross-sector-strategy#foreword-maria-caulfield-mp>.
- Gulddal, Jesper. "'Beautiful shining order': detective authority in Agatha Christie's Murder on the Orient Express." *Clues*, Vol. 34, No. 1, 2016, pp. 11-21.
- Office for National Statistics. "Suicides in England and Wales: 1981 to 2024." 3 Oct. 2025, <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/birthsdeathsandmarriages/deaths/bulletins/suicidesintheunitedkingdom/latest#suicides-registered-in-england-and-wales>.
- Wynee, Catherine. "Sherlock Holmes and the Problems of War: Traumatic Detections." *English Literature in transition, 1880-1920*, Vol. 53, No. 1, 2010, pp. 29-53.
- 有栖川有栖「華麗なる名作」『オリエント急行の殺人』アガサ・クリスティ、山本やよい訳、早川書房、2011、pp. 409-13.
- ヴァレンタイン、カーラ『殺人は容易ではない アガサ・クリスティの法科学』久保美代子訳、科学同人、2023.
- エドワーズ、マーティン『探偵小説の黄金時代』森英俊、白須清美訳、国書刊行会、2018.
- 笠井潔『大量死と探偵小説』星海社、2024.
- クリスティ、アガサ『アガサ・クリスティ自伝(上)』乾信一郎訳、早川書房、2004.
- .『オリエント急行の殺人』山本やよい訳、早川書房、2011.
- .『アガサ・クリスティ自伝(下)』乾信一郎訳、早川書房、2012.
- .『邪悪の家』真崎義博訳、早川書房、2012.
- グリペンベルク、モニカ『アガサ・クリスティ』岩坂彰訳、講談社、1997.
- 厚生労働省自殺対策推進室、警察庁生活安全局性格安全企画課『令和6年中における自殺の

- 状況』厚生労働省, 2025, <https://www.mhlw.go.jp/content/001464717.pdf>.
- 志渡岡理恵「アガサ・クリスティと第一次世界大戦」『実践英文學』65 卷, 実践女子大学, 2013, pp. 49-62.
- 高橋哲雄『ミステリーの社会学：近代的「気晴らし」の条件』中公新書, 1989.
- ドイル, コナン「海軍条約文書事件」『シャーロック・ホームズの思い出』延原謙訳, 新潮社, 1953, pp. 261-315.
- .「最後の事件」『シャーロック・ホームズの思い出』延原謙訳, 新潮社, 1953, pp. 316-42.
- .「サセックスの吸血鬼」『シャーロック・ホームズの事件簿』延原謙訳, 新潮社, 1953, pp. 141-69.
- .「高名な依頼人」『シャーロック・ホームズの事件簿』延原謙訳, 新潮社, 1953, pp. 6-49.
- .『バスカヴィル家の犬』延原謙訳, 新潮社, 1954.
- .『コナン・ドイルの心霊学』近藤千雄訳, 新潮選書, 1992.
- 中尾真理『ホームズと推理小説の時代』筑摩書房, 2018.
- 延原謙「解説」『シャーロック・ホームズの思い出』コナン・ドイル, 延原謙訳, 1953, pp. 343-50.
- .「解説」『バスカヴィル家の犬』コナン・ドイル, 延原謙訳, 1954, pp.315-18.
- バイヤール, ピエール『シャーロック・ホームズの誤謬—『バスカヴィル家の犬』再考』平岡敦訳, 東京創元社, 2011.
- 宮地信弘「シャーロック・ホームズ：世紀末ロンドンの神話的ヒーロー」『三重大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学』50 卷, 1999, pp. 63-86.
- ライリー, ディック, バム・マカリスター『ミステリ・ハンドブック シャーロック・ホームズ』日暮雅通訳, 原書房, 2000.
- ワースリー, ルーシー『イギリス風殺人事件の楽しみ方』中島俊郎, 玉井史絵訳, NTT 出版, 2015.